

# 児童の社会的な見方・考え方を育むための “地図が介在する学び”の可能性を探る

合 川 由 美

社会科の数ある視点の中で地図を活用して考える視点は、社会的事象の意味を捉えるために必要不可欠なものである。そこで、地図を効果的に活用するための地理的技能や地図活用の意識などの調査・分析を通して児童につけたい力を考察し、「福井震災」という題材で教材開発・授業実践を行った。ねらいに即した地図の活用により、児童は社会的事象を空間的な広がりの中で捉え、福井震災を多面的に理解し、ひいては地域社会への思いを新たにした。この研究を通して、「地図で考える」視点を授業に取り入れる有用性を検証することができた。

〈キーワード〉 地図、社会的な見方・考え方、主題図、地図活用、地理的技能、地域素材

## I 主題設定の理由

中央教育審議会答申（平成20年1月）に示された「社会科、地理歴史科、公民科」の改善の基本方針の中に、次のような記述がある。

小学校・中学校・高等学校を通じて、社会的事象に関心をもって多面的・多角的に考察し、公正に判断する能力と態度を養い、社会的な見方や考え方を成長させることを一層重視する方向で改善する。

小・中・高の10年間を通して育てていく「社会的な見方・考え方」。小学校社会科の4年間で培う「社会的な見方・考え方」とはどのようなものだろうか。

小学校社会科の学習は、「人々の社会生活の総合的な理解」を通して公民的資質の基礎を養うことを目指している。総合的な理解とは、自分との関わりを出発点としながらも客観的でかつ未来につなげていけるものである。その理解をもたらす捉え方を育てることが小学校4年間で培う「社会的な見方・考え方」を育てるといふことであると考へ、社会的事象の意味を理解するための視点を児童の中に確立させたいと考へた。その視点の一つが「地図活用」に基づく「地図で考える」視点であると仮定する。そして、その視点は社会科の思考力・判断力・表現力を支える一助ともなることを検証したい。

児童が社会的事象に出会ったときの自分なりの見方・考え方を土台にして多面的・多角的な考へを行ひ、確かな理解を深めることができる地図活用の魅力を探究すべくこの主題を設定した。

## II 研究の目的

地図活用の研究を行ひ、身近な地域素材を生かした教材開発をする。その授業実践において、「地図で考える」視点を児童がもつことは、その社会的事象の意味・意義を捉えるのに効果的であることを検証する。そして、社会的事象の確かな理解が「社会的な見方・考え方」を育む大切な学びであることを提言したい。

## III 研究の方法

- 1 地図活用におけるアンケート回答の分析・考へを行う。
- 2 アンケート回答の分析・考へから地図活用における提案を行う。
- 3 「地理的な見方・地理的な考へ方」からの考へを行う。
- 4 地図を活用した授業実践・実践後の検証を行う。

## IV 研究の内容

### 1 地図活用におけるアンケート回答の分析・考察

地図という教材の課題や展望を探るために研究協力校において調査を行った。

#### (1) 方位の知識に関する調査（対象 小学校3年～6年の児童540名）

方位記号を見て4方位を問う調査において、正答率は図1のように4年生が1番高く、次いで6年、5年、3年という順になった。また、児童の誤答内容をみると、図2のように東西を正確に指摘できなかった誤答が全誤答の半分を占めていた。地図上の方位の知識は4年生の時期が最も確かであること、また東西の判断は難しく間違いやすい傾向にあることがわかった。

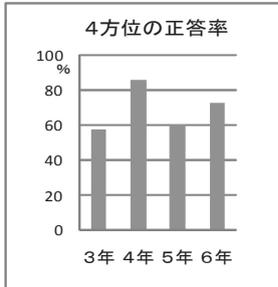


図1

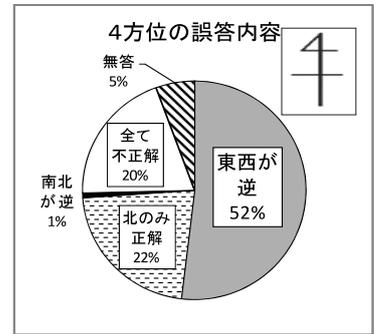


図2

#### (2) 地図記号の知識に関する調査（対象 小学3年～6年の児童540名）

小学校3年生の副読本『わたしたちの福井市』で学習した主な地図記号の名称を聞き、学年毎の正答率で表したものが図3である。これを見ると、地図記号それぞれの正答率には学年間にばらつきがあり、地図記号の知識も学年が上がるにつれ確かになるとは言い難い。しかし、平均をとると4年生

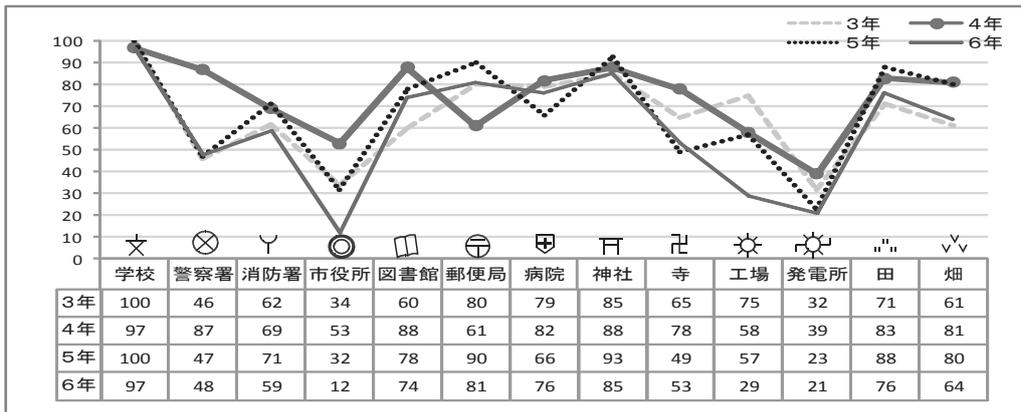


図3 主な地図記号の正答率

の正答率は他学年より高い結果であった。

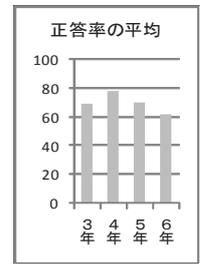


図4

#### (3) 地図帳使用についての調査（対象 小学4年～6年の児童385名）

表1

学年	地図帳が好き (%)
4年	74
5年	81
6年	56

本項目では、地図帳を教科書として初めて手にする4年生に焦点をあて考察する。地図帳を見るのが好きかきらいか、また、地図帳が好き、地図帳がきらいと答えたそれぞれの児童に、「どんなことが好きか」、「どんなことが苦手か」を調査した。地図帳が好き、どちらかといえば好きと答えた4年生の児童は74パーセントおり、好ましい結果である。また、図6・7のグラフからは、地名に関わる地図帳の活用に興味をもって取り組んでいる児童が多い一方で、地図帳がきらいな児童は、情報

の多さに戸惑い、地図帳を使って調べることが難しいとしていることがわかる。

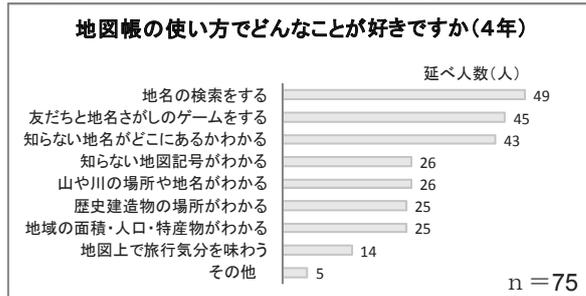


図5

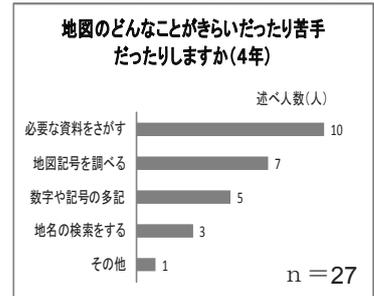


図6

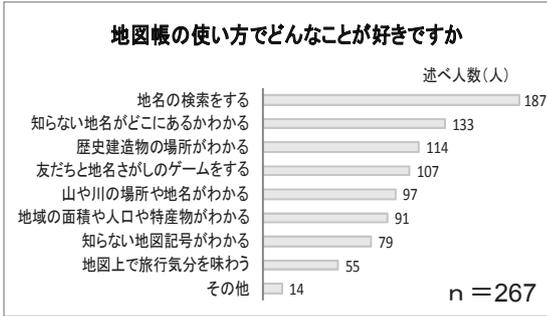


図7

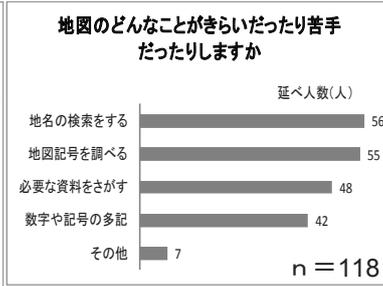


図8

また、4～6年全体では図8・9のようになった。「地名の検索」という地図活用の基礎的技能が、好きな分野でも苦手な分野でも1位となっていることから、地図を使う際の作業時間の個人差

を考慮した支援がとても重要であることがわかる。

(4) 児童の地図認識についての調査 (対象 小学3年～6年の児童540名)

次の地図のどこかに学校をつくりたいと思います。どこにつくったらよいか、自分がよいと思うところに印をつけてください。また、わけもあったら書いてください。

3年生に上記の質問で調査を行ったところ、「わけ」について次のような回答が得られた。

- ・人がいっぱいいるところがいい。また、家がいっぱいだと、とても安全で、不審者に追いかけても逃げ込める。
- ・自分の学校の近くにも郵便局があるから、これもそのような場所にした。目印にもなる。
- ・広くて大きい道を通った方が安全だと思うから。
- ・今よりも大きい学校が建てられるから。
- ・学校に通ってくる人が遠くて大変じゃないようにしたい。



図9 (X地点は1番多く選択されていた場所)

まとめると

- ①不審者・交通事故からの安全面を考えた選択である。
- ②現在通っている学校と同じように郵便局が近くにある環境を選択している。
- ③現在通っている学校より広く大きな学校を建てるための土地を求めている。
- ④校区内の通学距離にあまり違いがないような配慮を考えている。

上記のような傾向は4年～6年も同じであったが、学年が上がると下線で示す視点が加わり、より説得力のある記述、豊かな表現が見られた。(下線は筆者が付記)

- ・広い道のそばの方が、狭い歩道よりも交通事故が少なそう。(比較して判断)
- ・田んぼを埋め立てて広い敷地がつかれる。・広い場所につくった方が、火事があったときに(避難所として)たくさんの人が来れるから。(現在と未来の状況を予想しながら判断)
- ・田んぼの中に建てた方が誰にも迷惑はかからない。(公民的な考えに関わる判断)
- ・通学距離の関係で中心に位置した方がいいと思ったから。(図郭の中の空間意識の言語化)

今回のようなテーマをもとに、地図を使って思考・判断する学習では、児童は地図に自分の地域を重ねて解釈したり、日頃から考えている思いを実現できるように考察したりしていた。そして、それは3年生から十分可能な学習活動になった。

住んでいる地域を比較対象に据えて、地図中の場所の判断を行ったと思われる児童が多かったことは、児童の表現を実感をもって受け止めるために、教師自身が校区などの身近な地域の様子を十分に把握しておくことの重要性を示している。

次に、小学校5年生の児童30人に、予め場所指定をしておいたものを見せ、その理由を問うという先の調査とは逆の聞き方をしたところ、一人の児童から多くの意見を引き出すことができた。一般論として、高校生になると論理的・演繹的思考が可能になると言われる。やはり、この小学校中学年の時期は、言語活動を活発にするという点で帰納的思考を意識した地図活用の工夫を考慮していくことは大事なことであろう。

表2 回答数調査(5年)

理由	人数
1つ	2人
2つ	7人
3つ	7人
4つ	6人
5つ	2人
6つ	5人
7つ	1人

## 2 アンケート結果の考察からの提案

調査結果を受けて以下を提案する。地図にいかになれ親しむかがポイントである。

### (1) 方位や地図記号の意味する内容に関わる学習活動を行う

八方位は4年生修了までに身に付ける知識とされている。この方位によって、初めて地球上の一点から見る他の地点の所在する方向を定めることができるので方位知識の定着はとても重要である。

ある場所の地理的位置を捉えることにも方位の知識は欠かせない。例えば、緯度と経度で示す座標的位置把握というものは4方位を理解して表現できるものといえる。また、地図で培う空間認識力は方位の理解によって確かなものになり、行動範囲や行動する意識を左右するといわれるメンタルマップを正確に形成する力につながる。それでは、方位の知識を身に付けるにはどうしたらよいのだろうか。一番手軽な方法としては、教室の4方に東西南北の掲示物を貼り、教室の中でいつも方位を感じることができるようにすることである。こうすると、身近な空間の場合は戸外でも正確に方位を指摘できるようになる。機会があるたびに児童と方位を確認することや、次のような事柄を伝えることも興味をもたせるきっかけになる。「なぜだろう？」と思う児童がいたら、かなり意欲的といえる。

- ①教室の黒板は西の方角にあることが多い。
- ②衛星放送のアンテナは南西の方向を向いている。
- ③太陽が日中に出ているときは、時刻と影の向きで方位がわかる、など。

「地図記号」については、寺本（2002）が、「地図記号の意味する内容に関わる学習活動が重要」と述べている。例えば、警察署の地図記号 ⊗ の意味（警棒が重なったもの）を知る前と知った後ではその記号の理解度は大きく変わってくるだろう。また、地図記号を学習するうえで更に肝要なことは、建物などを記号化する利点は何かを考えることである。地図作成には総合描示という技術が不可欠である。縮尺が小さくなるということは、何かを省略していかないと縮尺で示された範囲を記載できない。その過程において地図記号が存在する必然性を考えさせることで、その意義を実感を伴って理解することができる。

地図記号で調査活動を展開していくのも興味深い。その視点として次の3つはどうだろうか。

- ①地図記号は世界共通ではない
- ②地図記号には変化や消滅がある
- ③地図記号には最新作がある

例えば、①の例では、日本の郵便局のマークは「逓信省」のテの図案化したもの ⊕ であるのに対し、フィリピンは「封筒」、アメリカは「鷲」の図案化したものを使っているそうである。

山口（2002）によると、3・4年の時期は「地理意識の発展期」の入り口にあたり、人生で最も「地理認識」「空間認識」が身に付く時期とのことである。この時期に、方位学習や地図記号学習に時間をかけることは、大変意義があることと考えられる。

### (2) 地図を補助する資料の準備を行う

地図活用を苦手とする児童の理由は、「見にくい」、「字が細かい」、「地図自体がきれい」、「地図帳を使うのが面倒くさい」などであることがアンケートの結果からわかった。

表3 地図帳をきれいな理由

- ・何が書いてあるかわからない。
- ・使い方がわからない。
- ・探す、調べるのが 面倒くさい。
- ・情報が多い。（「帝国書院」調べ）

これは、表3「地図帳をきれいな理由」（小学校4年～6年12000人対象）の中で挙げられたものとはほぼ同じ傾向である。このことを図10「デールの経験の円錐」と関連付けて考えてみよう。デールは、

「学習は経験の一般化である」とし、学習における経験を具体的なものから抽象的なものまで11の段階に区分した。これによると、地図は上から2番目の「視覚的シンボル」にあたり、かなり具体性に欠けたものであるといえる。地図活用時にこの認識をもって地図の抽象的な部分を補うような工夫（写真やフィールドワークのような体験）をしていくことは、地図を介在する学びを構成する上で必要なことであると思う。

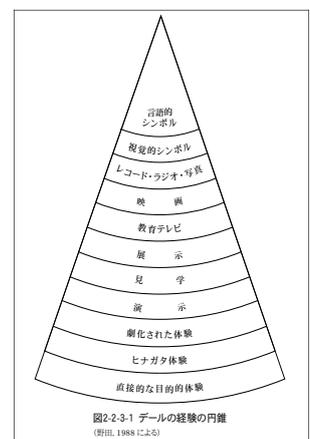


図10 デールの円錐

(3) 歴史の授業に地図帳を活用する

図11では、6年生の児童の56%が地図帳が好きと示している。この結果は4年生(74%)、5年生(81%)に比べ大幅に少ない結果となった。先述の帝国書院の調査でも、6年生の「地図帳が好き」の割合は一番低く、その理由を「6年時に地図帳があまり使われないことに無関係ではない」と分析している。小学校学習指導要領解説社会編には、6年生の目標の(3)に、「…地図や地球儀、年表などの各種の基礎的資料を効果的に活用し…」という記述がある。従来、歴史の時間に地図帳を持つてくることはあまりなく、教科書等の主題図や位置図などを活用していた。しかし、歴史を実感的に理解するのは、現代との関わりを発見したときであろうことを考えると、現在の土地の様子を表す地図帳の中に歴史の足跡を見ていくことはとても意義があることである。歴史は過去における様々な人々の「意志」や「決定」の産物である。帰納的思考で考え、様々な歴史の可能性を話し合うのに最も適した教材となりえるのではないか。

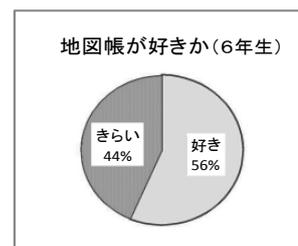


図11

また、地図帳で位置や地形を知ること、歴史的な事象をさらに深い理解へと導くこともある。平成23年度「新しい社会6上」(東京書籍)の教科書に載っている地図の数を調べてみると、表4のように、関係ページ数における地図の割合が多い時代は鎌倉時代であった。鎌倉幕府の政策と地形との関わりは有名で、鎌倉幕府の立地場所、「切り通し」、「一ノ谷の戦い」などは地形と大きくからんでいる諸政策である。地図帳を活用して学習を進めることが効果的な一時代と言える。吉田松陰は、「地理学なくて歴史を学ばんとする者は、盤がない碁をするようなものだ」と述べている。地図は地理学の言葉のような存在である。歴史を学ぶときに、地図帳を広げることには大変意味があると言える。

表4 地図の記載数

	ページ	地図の数
平安時代まで	P2~43	12
鎌倉時代	P43~55	8
室町時代	P56~63	1
戦国時代	P64~71	3
江戸時代	P72~103	10

また、地図帳で位置や地形を知ること、歴史的な事象をさらに深い理解へと導くこともある。平成23年度「新しい社会6上」(東京書籍)の教科書に載っている地図の数を調べてみると、表4のように、関係ページ数における地図の割合が多い時代は鎌倉時代であった。鎌倉幕府の政策と地形との関わりは有名で、鎌倉幕府の立地場所、「切り通し」、「一ノ谷の戦い」などは地形と大きくからんでいる諸政策である。地図帳を活用して学習を進めることが効果的な一時代と言える。吉田松陰は、「地理学なくて歴史を学ばんとする者は、盤がない碁をするようなものだ」と述べている。地図は地理学の言葉のような存在である。歴史を学ぶときに、地図帳を広げることには大変意味があると言える。

3 「地図で考える」視点

中学校学習指導要領解説社会編、地理的分野「内容の取扱い」(2)ア②地図の活用に関する技能の項目に以下のような記述がある。(「福井震災」の授業実践と関わりのある項目を抜粋して記述する)

- b 学習や日常生活の中で出てくる地名に関心を持ち、その位置を確かめるようになること。
- c ここにはどのような地理的事象がみられるのか、この地理的事象がなぜこの地域にみられるのか、地理的事象を地図から読み取ったり、地図を通して追求しとらえたりする技能を身に付けること。
- d 調査結果や統計を適切に地図化する技能を身に付けること。

これらの地理的スキルは「地理的な見方・考え方」を行うためのものであり、「地理的な見方・考え方」はまさに地図の上で育まれるものと言える。地図活用能力が必要不可欠であるとされ、その充実が求め

表5 地理的な見方・考え方

地理的な見方…どこにどのように広がっているのか  
 地理的な考え方…そうした社会的な事象がなぜそこでどのようにみられるのか

られている今、小学校3年～6年を地理的スキルの基礎を培う学年としてしっかりと位置付ける必要がある。濱野(2012)が中学2年で学習する「身近な地域の調査」の単元を、地理的分野のまとめであり、これまでの学習成果の集大成であり、地理的スキルの育成の最終段階であると捉えていることは、それまでの時期の地図に親しむ活動や地理的スキルを習得するための活動の重要性を示唆している。

小学校では、まず「地理的な見方」に示されるように、どこで起きて、どのような分布で広がっているのかなど、社会的な事象を空間的な広がりの中で捉える学習を地図活用を工夫して行いたい。そして、「地理的な考え方」に基づいて、様々な関係や理由を考察していく活動を行いたい。これが、社会的な見方・考え方の成長を促す学習活動となると考える。

4 「福井震災」の授業実践とその考察（「福井震災」3時間配当）

地理的技能の習得や地理意識の発達において重要な時期と考える4学年の社会科のまとめの教材として、地域素材を生かした教材開発を行った。

(1) 題材に関わる児童の実態をつかむ

題材に関わる児童の体験や、福井震災の知識は次のようなものであった。

〈福井震災についてのアンケート〉

・昭和23年に起きた地震。1名	・橋が壊れた。1名
・マグニチュード7以上の地震だった。1名	
・大きな地震で、周りの家が倒れてたくさんの人が亡くなった。1名	・私のおばあちゃんが経験した。1名
・知らない・わからない。33名	n = 38

〈地震に関わる体験〉

・防災センターで震度4を体験。
・毎年6月28日に避難訓練を行っている。
・自校の給食室の耐震工事があった。
・3.11の地震・状況を知っている。

宿題として出した福井震災のアンケートでは、家の人に聞いたという内容のものが5名、38名中33名が「福井震災を知らない、わからない」と答えたことなど、福井震災についてほとんど知識を有していないことがわかった。しかし、担任の先生から聞いた児童の地震に関わる体験には、今回の授業のキーワードになるものがあり、授業を構成するうえで大変貴重な情報を得ることができた。

(2) 地図で考える活動のポイント

社会的事象を、地図に表して見たり考えたりする活動に際して、次の2点をポイントに据えた。

- ① 福井震災を地理的な見方に基づいて捉えるための主題図の作成と視聴覚教材の有効な活用を行う。  
福井震災を捉えるときに、「どこに起きたのか」、「どんな広がりがあったのか」の2つの視点を必ず入れて児童が説明できるようにする。そのために、激震地や福井震災の影響による各地の揺れを表す震度統計表を地図化する作業を行う。
- ② 地図帳を活用する時間を確保する。各地の震度統計表を地図化する際に、児童に「地名の検索」を数多く行わせ、地図帳に慣れる時間を意図的に盛り込む。また、検索した地が位置する都道府県に色を塗って主題図を仕上げることで、「47都道府県の名称と位置」の活用も兼ねる。

(3) 授業の実践について

① 学習指導案

単元名 県とわたしたちのまちの発展「福井震災を学習する」（全3時間）

目標 ・3時間を通して解決を図る学習課題を設定する。（第一時）

- ・主題図を作成し、その内容をもとに福井震災の規模や広がりを理解し、福井震災の様子を文章に表す。（第二時）
- ・震災からの復興を辿る中で、福井市と不死鳥を関係付ける考察ができる。（第三時）

段階	学習内容・活動	学習支援
第一時	<p>○福井市のシンボルマークである不死鳥のマークを見て、考えを出し合う。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>不死鳥のマークは見たことがあると答えた児童は多数。中には「不死鳥」と答える児童もいたが、ほとんどがわからない様子であった。ただ、マンホールに描かれたデザインは、ほとんどの児童が知っており、公民館で見たよとヒントを出すと、市民憲章の名前が挙がったクラスがあった。</p> </div> <p>○3時間を通して解決する学習課題を設定する。</p>	<p>○不死鳥の意味を補足する。</p> <p>○不死鳥と福井の関わりを示す身近な資料を提示する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・マンホールのデザイン</li> <li>・福井市市民憲章に使われているマーク</li> <li>・福井市市民憲章の名称を通称「不死鳥の願い」としていること</li> </ul> 

なぜ、福井のシンボルマークは不死鳥なのだろう

	<p>「不死鳥の願い」の制定日と、6月28日の黙祷との接点に福井震災があると気付いた児童が現れる。</p> <p>○次時の学習課題を設定する。</p> <p style="text-align: center;"><b>福井震災についてみんなで学習しよう</b></p>	<p>○日付け(6月28日)に注目させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「不死鳥の願い」の制定日が6月28日</li> <li>・毎年6月28日に行われる黙祷</li> <li>・地震の避難訓練が行われる月(6月)</li> </ul>
第二時	<p>○福井震災を地図に表して見る〈作図〉</p> <p>地図 <b>A</b> …激震地区を捉える。</p> <p>地図 <b>B</b> …地震の規模を捉える。</p> <p>○地図 <b>B</b> の主題をつけて班で発表する。</p> <p>○福井震災を地図に表して考える〈説明〉</p> <p>どのような震災だったかを考え、文章に表す。</p>	<p>○地図 <b>A</b> の作図を通して、地図化を練習する。</p> <p>○地図 <b>B</b> の活動は個人→班で行うようにする。</p> <p>○地図につけた主題をグループ内で伝え合い、自分の考えと重ね合わせながら「福井震災」の規模の大きさを共有できるようにする。</p> <p>○福井震災の写真を準備する。(パワポ資料)</p>
第三時	<p style="text-align: center;"><b>福井の復興の様子をたどってみよう</b></p> <p>○当時の人々の苦労や努力の様子、復興される街並みの様子を知る。</p> <p style="text-align: center;"><b>なぜ、福井のシンボルマークは不死鳥なのだろう</b></p> <p>○福井と不死鳥を関係付ける考察を行い、文章に表して発表する。</p>	<p>○震災直後と復興後を比較できる資料を用意する。(パワポ資料)</p>

② 作図

今回の授業では2つの作図を行った。地図 **A** により地震の中心地、地図 **B** により地震の規模や広がりをつまえる。地図 **A** では、芦原(旧吉崎村)、森田、福井、鯖江(旧北中山村)の4つの地点を白地図にとり、それを線をつなぎ、地震の中心地はかなり縦長の地域に及んでいることをつまむ。(南北約60km、東西約20km)



地図 **A**

れくらいの規模のものであったかを地図で捉える活動を行った。

この地図の主題を考える活動において、児童は表6のような表現を使った。話し合いの中で、7~10の意見は削除され班の意見として1~6が提案された。

表6 震度分布を表す主題

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1 「福井震災が中部、中国、近畿地方をおそった」</li> <li>2 「ゆれは、どこまで伝わったのか。」</li> <li>3 「福井震災の影響がおよんだ範囲」</li> <li>4 「福井の震源地から広がった地震地図」</li> <li>5 「福井地震の揺れが伝わった都道府県」</li> <li>6 「福井震災の影響を受けた場所」</li> <li>7 「福井震災で町がボロボロになった場所」</li> <li>8 「福井震災が起きて被害があった所」</li> <li>9 「福井震災が起きた状況をどう過ごすのか」</li> <li>10 「福井震災を起こした県」</li> </ol> |
|---|

地図 **B** は福井震災の震度分布である。震度統計表を使って、「地名の検索」、「都道府県の確認」、「白地図に該当地区の色塗り」という活動を組み合わせ地図を作成した。このように2つの作図を通して児童は、福井震災がどこで起きてど



地図 **B**

この中の「〇〇地方」という語句の使い方においては、社会的な事象の空間的な広がりを具体的な地名を伴って表現している点を評価したい。作図をしなれば出てこなかった表現ではないかと捉える。また、「伝わる」や、「影響」「及ぶ」「広がる」の語句の使用は、福井震災がどこで起きたかという位置を明確に掴んでおり、規模の大きさを理解しているものであるので適切な表現といえる。この二つの作図とその主題を考えたことは、福井震災の規模の大きさを理解するうえで意義があったと思われる。授業のまとめで児童が書いた福井震災の説明にもこの表現は使われていた。

あわら市や福井市が一番ゆれた場所であった。関東、中部、近畿、四国地方にもその影響があった。



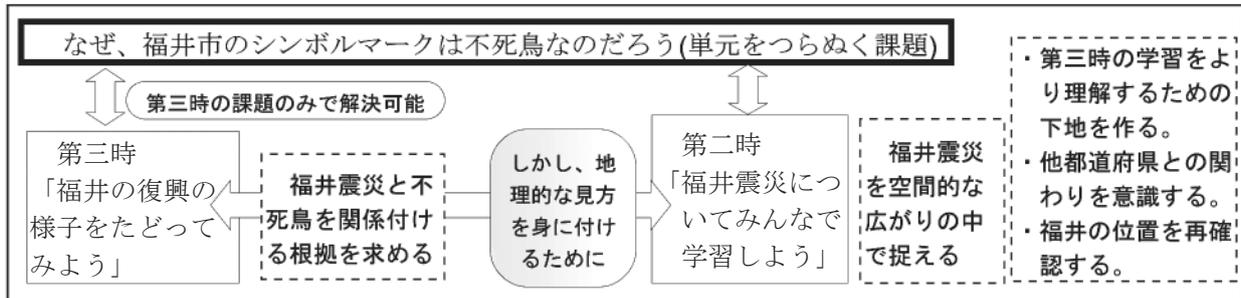
福井震災は1948年6月28日に起こった。震源地は福井市、あわら市。丸岡城や中角橋がこわれるくらいの大震災であった。マグニチュードは、7.3であり、そのゆれは北に新潟県、南は山口県まで広がった。

福井県で起きた地震は、近畿地方に震度4～1、関東地方に震度3～1の範囲で、遠いところまで地震が伝わるものだった。

③ 学習課題

本授業で立てた3つの学習課題を位置付けると表7のようになる。

表7 学習課題の位置付け



3時間目のまとめで、児童が福井と不死鳥の関係付けに用いたキーワードは「乗り越える」「あきらめない」「協力する」「忘れない」であった。

福井市は戦争時の空襲のあと、あの福井震災、そしてすぐ洪水が起き、短い間に大変な被害に3回もあった。しかし、あきらめず、それらを乗り越えた福井市だったことがわかった。それが何度も生まれ変わるといふ不死鳥を福井市のシンボルマークにした理由だろう。



ここに、福井市に対する認識の変容が見られた。

- ・田んぼや自然があるまち
- ・長生きの人が多い
- ・やさしい人が多い
- ・いなか ・さびしいまち



- ・あきらめないまち
- ・すごいまち
- ・苦しさを乗り越えたまち
- ・協力しているまち

大変なことが3つも重なったのに、あきらめないで協力したから今の福井があると思う。福井は勇気ある町だと思う。もし、これから震災があったとしても、63年前の経験を生かして、みんなで協力したいと思う。

地図を活用した社会的事象の確かな理解が、児童の自分なりの見方・考え方を変えたものと思われる。

福井震災を地理的な見方で捉えた本授業は、児童が地域に対して新たな思いをもつことを確立するに至った。

多くの人の命が奪われ、多くの人の希望が失われたのに、それでもあきらめず進んできた。そのことを心に刻んで、忘れないように、いつも不死鳥の意味を大切にしていきたい。

(4) 授業の反省

今回の授業では及ばなかった部分が1点ある。それは、福井市が、まちの復興の過程で何を考え何をしてきたかを踏まえた上で、今、現在を生きている私たちにできることは何かを考え合うという学習である。4年生という発達段階を考えると、「地震に備えているいろいろな準備をしたい」、「家の人に防災を呼びかけたい」、「避難場所を家族で確認する」などの意見を予想することができる。いい意見であると思うが、筆者としては児童が今の自分にできる身近なことを考えるだけではなく、福井市の一市民としてやっていかななくてはならないことを心に浮かべてほしいと思っていた。

中央公園にある震災の記念碑には次のような言葉が書かれている。「…市民は常に此災禍を想起して、心を戒め身を慎むと共に、当時寄せられた内外の温かい同胞愛と人類愛を胸に刻み、感謝報恩の念に燃えつ、日常の業務にいそしまねばならない」これは、福井震災の甚大な被害をしっかりと理解しないと心に響かない文言であろう。また、福井市は1998年、福井震災50周年のときに、「世界震災都市会議」をフェニックスプラザで行っている。震災時、日本各地から温かい励ましや援助をいただいたことを忘れず、未曾有の体験をした地域としてその経験と教訓を他に発信していくということが、

福井震災という社会的事象の意味を正確に捉えた結果として、各自の心に灯ることが社会的な見方・考え方を成長させ、公民的資質の基礎を養うことになると思われる。

## VI 研究のまとめ

### 1 成果と課題

本研究の目的として掲げた地図の有用性の検証は十分にでき、今後の社会科の授業において、工夫を重ねながら地図を活用していきたいという思いは大変強くなっている。

今回の授業では、次のようなことが地図活用の副産物であった。一つ目は授業の中で話し合い・聞き合いの場面を設定しやすかったことである。地図は分からないことが多く、地図が発信する情報は多岐にわたるものであるからこそ教え合い学習に向いており、一斉にできること、班でした方がよいことなど指導形態の変化を必然性をもって行うことができた。二つ目は地図に示される内容を背景に社会的事象を捉える視点は新たな教材観をもたらし、筆者自身の社会科の教材開発の意識が大きく高まった。

ハーヴェイは、『地理学基礎論』の中で、「地図は空間情報を記述・表現・蓄積・伝達し、思考の整理、一般化、理論化を助け、地図の上での作業・分析を可能にする」としている。このような効用が期待される「地図」が介在する学びは、社会的な見方・考え方を育む一端を担っているはずである。指導形態・授業の切り口・評価の仕方の多様な変化が期待できるなど社会科の授業をあらゆる面で示唆してくれる教材となり得るだろう。

課題として挙げたいことは2点ある。1点目は地図を使った教材開発、児童の地理的技能の習得には時間がかかることである。2点目は地理的技能の習得には繰り返し行う学習が必須であるので、いろいろな社会科の授業の場面で、児童の地理的技能の習得を意識した活動を繰り広げていかねばならないことである。児童が、小学校を終えた時点で「読図」を通して地域を語る力を身に付けさせることができるようにこれからも研究を続けたい。

### 2 研究発表を通して

発表を行う過程で、研究紀要に書いた内容が焦点化されていくのを実感した。また、発表を通して、授業実践で行った事柄の追体験やそれについての協議を参加者の方にしていただいたこと、学び合いの時間に各班からの発表の中で筆者の実践の意味付けを強化してくださる発言があったこと、また、その発言によってある班の協議では疑問として挙げられていたことが解消されたという話し合いの流れもあり、筆者自身にとって大変勉強になり、有意義な時間をつくっていただいた。

最後になりましたが、本研究の調査や授業実践に御協力いただいた社南小学校の先生方、児童のみなさんに心より感謝申し上げます。

#### 《引用文献》

- 文部科学省(2008)『小学校学習指導要領解説社会編』東洋館出版社、p4
- 文部科学省(2008)『中学校学習指導要領解説社会編』日本文教出版社、p64
- 文部科学省(2012)『中等教育資料』2月号 p47
- 高崎正義(1994)『総観地理学講座 3 地図学』朝倉書店 p20
- 中村和郎、高橋伸夫、谷内達、犬井正(2009)『地理教育講座II 地理教育の方法』古今書院、p269 図2-2-3-1 「デールの経験の円錐」(野田1988による)

#### 《参考文献》

- 山口幸男(2002)『社会科地理教育論』古今書院
- 荒木一視、川田力、西岡尚也(2006)『小学生に教える「地理」』ナカニシヤ出版
- 寺本潔(2002)『地図の学力』明治図書
- 帝国書院(2003)『世界が広がる!こどもと地図』2003年度特別号
- 中村和郎、高橋伸夫、谷内達、犬井正(2009)『地理教育講座I 地理教育の目的と役割』古今書院